

ヤンゴン素描 No.24

山形洋一

オッチン 元軍用駅近くにはびこる結核

駅名表示では植民地時代の Okking を踏襲しているが、発音は「オッチン」。YCDC 地図帳では Oakkyin と綴られている。駅の向かいは鉄工所や自動車修理の町工場が並び、トンカントンカンと音がしている。

この駅と、わずか 400 メートル北のタマイン駅とは、ともに 1930 年発行の地図に記載されている。今でこそ住宅が建て込んでいるが、二駅分の利用客が第二次世界大戦前にあったとは思えない。市場があるタマイン駅ひとつで十分だろうに、なぜこの至近距離にオッチン駅を置いたのか。

その答えは、当時の地図から読み取れる。オッチン駅をはさんで、西の低湿地にはライフル射撃場があり、東の丘陵は軍の野営地となっていた。つまり軍事訓練のための特別駅で、もっぱらカーキ色の制服に身をつつんだ軍人が乗り降りしていたのだろう。主力は頭にはカーキ色のターバンを巻いたインド系傭兵ではなかったろうか。



オッチン駅前のブリキ店

当時オッチン駅から北を見れば、400メートル先のタマイン駅前に牛車がならび、ヤシの葉葺きの市場には色とりどりの服装の女性達が、野菜、衣服、雑貨などをならべていたことだろう。今とちがって自動車の騒音がうんと少なかったはずだから、汽車が遠ざかったあとには風に乗って市場の喧騒が聞こえてきたかもしれない。

駅のすぐ東は700メートルほど低湿地がつづく。湿地の中をうねるわずかな隆起を縫うように道が整えられ、その両側にはチーク材を支柱とする高床式の伝統的家屋が立っている。いかにも低所得者の住宅地帯だ。ライン町の保健行政を統括する医務官から聞いた話では、このあたりに結核患者が多いという。結核が「都市貧困」や「密集地帯」と結びつくという教科書どおりの現象が、ここでも確認できる。

この「貧困ベルト」を真ん中に、西の射撃訓練場跡地には工場と高層住宅がすこしずつ建ちはじめているものの、概して人口密度は低い。また東のインセイン道路以東の丘陵では、繊維、ゴム、琺瑯、皮革などの軍事工場とヤンゴン大学の寮とが共存し、ここも人口密度は低く、結核との関連は低い。

これら東西の低密度地帯にくらべて、真ん中の「貧困ベルト」の特徴は、薬局がやたらと多いことだ。小路の角ごとに薬屋があり、よく過当競争にならないものだと感心させられる。たとえば日本の独身・単身生活者がコンビニを我が家の冷蔵庫がわりに重宝するように、ミャンマーのとくに貧困地帯では、高い診療費を惜しむ人たちが「向こう横丁の置き薬」を重宝しているのだろう。

薬店の規模もさまざまで、インド系住民の多い地区では、インド系が経営する薬局がちゃんとある。並んでいる薬のパッケージの色を見ると、化学薬品を多くそろえている店は白地に青の「クール」な色が基調となっている。それに対して伝統薬を売る店では、緑とオレンジを組み合わせて「有機的」イメージを演出している。

住民はちょっとした病気では病院などへは行かず、近くの開業医の診察を受けたり、薬屋で薬を求めて済ませている。受診行動は、勤務医が仕事を終えて帰宅し、開業医に早変わりする夕方に集中する。らしく、夕方の開業医の軒先に、患者が集まっている。それは奇妙に心和む風景だ。

(了)